迎春

東京小諸会の更なる発展を願って

東京小諸会「四季報」
春夏秋冬
発行：東京小諸会事務局　責任者：松井石根
事務局連絡先
〒344-0067 埼玉県春日部市中央 1-1-5
Tel：048-796-5391　Fax：048-796-5392
URL:http://www.komoro-kai.net
E-mail：office@komoro-kai.net

令和４年の新たな年を迎え、東京小諸会の会員の皆様、小諸市関係の皆様、関連団体の皆様、協賛企業の皆様のご健康とご繁栄をお祈り申し上げます。

令和２年、３年と続いた前代未聞の新型コロナウイルスの世界的蔓延により、日常の生活や企業や社会の活動が未知の状況の中で２年という長期にわたり筆舌には尽きせぬ苦渋をもたらしました。東京小諸会の活動も従来の活動が全面的に制限され、会員の皆様とのふれあいも会報や四季報、ホームページという媒体によってのみの活動になったことは残念でなりません。今年度は例年通りの総会や各種事業が対面により実施できることを強く願っています。令和２年４月に会長に就任以来事業計画を提示してまいりましたが、今年度も継続して実施して行きますのでよろしくご支援の程お願いいたします。

東京小諸会　重点事業計画

（６項目の重点方針）

①会員の増員を図る。現会員の子世代、孫世代の会員増員により、会の若返りと東京小諸会の継続的な発展を図る。②小諸ふるさと市民、小諸こどもふるさと市民の積極的な登録を推進し、若い世代層に小諸市を認識してもらう③ふるさと納税の具体的推進を図り小諸市の産業・観光に貢献する④東京小諸会総会への参加者の増加を図る⑤東京小諸会創立六十周年記念事業の実施計画⑥会報、四季報、ホームページ等の媒体による東京小諸会の情報発信を図る。

会長　松井石根

会創立60周年　記念行事について

昭和38年（1963年）に東京小諸会が発足して今年令和４年（2022年）で60年となります。今年度は60年目の年になります。先人の残したこの輝かしい歴史に敬意を表し、現在のよすがとし、未来への架け橋として何らかの形で記録に留めたいと思います。60周年記念事業案として（1）準備委員会・実行委員会の設置（2）記念誌の作成（3）永六輔（上を向いて歩こう）等の記念碑等の建立（4）記念式典等の実施等があります。

この事業計画は、東京小諸会会員、小諸市役所、こもろ観光局、小諸商工会議所、小諸市の各種団体、関係する個人等多くの皆様のご理解とご協力がなければ実現が困難であります。特に記念碑の建立については、小諸市関係者に主体をお願いし、東京小諸会も共同して推進できればと思っています。ご理解をいただき、ご協力を賜れば幸いです。

小諸こどもふるさと市民　市長訪問

令和３年11月10日、小諸こどもふるさと市民の代表12名が小諸市役所に小泉俊博市長を表敬訪問しました。小泉市長より小諸市の魅力をビデオで説明を受け、小諸市の魅力を体験しました。こどもふるさと市民を代表して高校３年生の須賀真之介君が小諸市の魅力を発見して多くの人に発信していくような活動をして行きますとの宣言がありました。若い人の目で新たな小諸の情報発信に期待したいと思います。

今回の訪問は、高峰高原、高原美術館、スーパーつるや、懐古園、市役所、小諸市内巡回「こむこむ」でした。

東京小諸会　ふるさと納税

ONE HUNDRED CLUB　会員募集

小諸市のふるさと納税には東京小諸会としても協力・推進しております。税法上の特典の外、小諸の魅力ある特産物の返戻があり、実質的な負担がなく、ふるさとの特産品を味わい、ふるさと小諸への貢献にもなります。また、納税額10万円以上の会員の集まりである東京小諸会独自の「ふるさと納税ＯＮＥ ＨＵＮＤＲＥＤ ＣＬＵＢ」の会員募集しております。多数の参加お待ちしております。

問い合わせ先…
東京小諸会事務局

果実まるごとジャム詰め合わせ

小諸市のふるさと納税の実績

平成29年度	5671 件	9090 万円
平成30年度	17410 件	22907 万円
平成31年度	28262 件	36718 万円
令和　2年度	22515 件	39203 万円

編集後記

♪水の流れに花びらを　そっと浮かべて泣いた人♪　山口洋子作詞、五木ひろしが歌い上げた、言わずと知れた名曲「千曲川」である。甲武信ヶ岳山頂付近の水源地の一滴から始まり、新潟に入ると信濃川と名前を変え沼沼と日本海に注ぐ日本一の大河で、全長三六七キロ、源流から約八五キロ付近にある小諸にとっても誇れる大自然である。山口洋子は女優・作詞家・直木賞作家・銀座高級クラブ「姫」のママと異色の経歴をもち、特異な恋愛もした女性であるが、小諸で千曲川を詠った明治の文豪島崎藤村の「千曲川旅情の歌」に感銘を受け、これを「千曲川」に改題し、敢えて現地には赴かず、東京に居ながら現地の情景を憧憬にも似た想いで詞を紡いだという。歌碑は戸倉上山田温泉にあるが、現地に赴いていないのだから私は小諸を思い浮かべながら紅白の大トリとなったこの歌を聴いている。

多くのヒット曲を生んだ山口は晩年、自身の作品の中で千曲川が一番好きと述懐していた。風光明媚でどこか哀愁漂う千曲川、歴史を創り歴史に造られた。小諸の街を流れ、灯りの数だけ人々の暮らしを今もそっと見守り続けている。

東京小諸会現会長のカラオケ十八番が千曲川であることは言うまでもない。

原口慎二＝小諸ふるさと市民
九州出身

＊四季報第５号（冬）は、第５号（秋）の誤りです

ふるさと小諸の思い出

私が東京の蒲田で生まれ、４歳の時、戦争末期の東京大空襲で我が家を焼失、家族は皆、小諸の御幸町（現在の小海線、東小諸駅前）の農家の大きな物置を改造した4軒長屋の1室に避難、終戦後の貧しい6年間を過ごした。母は家族の食べ物に腐心、ヤミ米を東京に運ぶ担ぎ屋を手伝い、毎日、米袋を背負って駅舎もないホームだけの平原駅迄運びわずかな運び賃を稼ぎ、我々子供は達は野原や畑のあぜ道でセリやナズナを摘んでおかずの足しにした。2年後、平原駅で待ち伏せしてた警官達の担ぎ屋一斉検挙で担ぎ屋から手伝いの母達まで全員が逮捕、米も没収され母達はその仕事から足を洗い、農家の仕事を手伝った。

父の会社も業績が悪く、給料も時々遅配となり、兄は小学校6年の新潟・鯨波への修学旅行の参加費二百円がどうしても払えず、兄一人だけがクラス内で不参加になった。その旅行の日、生徒達が皆、鯨波の海辺で燥いでいる頃、家に帰ると丘の上の石碑の台座に座ったままボーッと遠くを見乍ら、涙を浮かべている兄の姿を見ると、姉も私も兄に声をかけられず涙が溢れた。今にして思えば、我々の世代は皆、終戦後のどん底の貧しさを強いられ、しかし、そのどん底の貧しさを踏み台にしてその後の人生を生き抜いて来れたのかも？と思うと、今はむしろ、その貧しさの思い出がぬくもりすらを含んで、うれしい思い出となっている自分に気がついた。

青木　淳（御幸町出身）

小諸の懐古園で、美しい清水百合子先生前から２列目の中央、前列左から６番目に座っている体の大きな児童が筆者

八幡様相撲の思い出

野岸小学校

「はっけよい。のこった　のこった」回しに手をかけ、相手を投げようとするも、逆に跳ね飛ばされ、悔しい。

野岸小学校に入学したのは1953年（昭和28年）。私の自宅は乙女で、唐松、御幸町、荒堀、加増そして与良町を通って、学校までおよそ2キロメートル。子供の足で40分ほどかかった。当時の道路は未舗装のため、クルマが通れば砂埃が舞い上がる。ただクルマの数が少なかったので、今のようにあまり気にならなかった。

さて冒頭の「はっけよい」だが、学校の隣に位置する八幡神社では毎年秋のお祭りに相撲大会があった。（今も続いていますか？）。大人から子供までそれぞれの部で行われ、観客が周りを取り囲み、大いに盛り上がったものだ。

私は幼児の頃から痩せぎすだった。相撲をするにも何しろ軽いから、すぐに投げられたり、寄り切られたりで、確か一勝もできなかったと記憶している。毎日の通学で足腰は鍛えたつもりだったが、残念無念。

それでも八幡様相撲は私の小学校時代にとって、忘れられない一幕だ。

柏木慶永（乙女出身）

八幡宮八朔相撲

コラム

小諸の名を知っている年代層は高齢者は80％、高校生で5％とのことを聞いた。このままだといずれ小諸の名は地元民のみになる懸念がある。小諸ふるさと市民、小諸こどもふるさと市民の意味するところは極めて将来の小諸にとって重要である。どの様な方法が新たなふるさと市民を増やす切っ掛けとなるだろうか。多くの提言を期待したい。今回初めて小諸こどもふるさと市民の12名の一行を小諸に送った。東京小諸会としては小さな一歩を踏み出した。この小さな一歩が未来への大きな一歩に繋がって欲しい。子どもたちの新鮮な目線で小諸の新たな発見を期待したい。会員の皆さんもお子様やお孫様をお連れして小諸を訪問していただきたい。小諸の名を歴史に埋もれさせないためにも。

三楽与太郎

素晴らしい環境のなかで

生まれも育ちも小諸で、ある事情で故郷を離れることになりました。あれから二十年近く経ちますが、時々ふと小諸での生活や友人の事を思い出したりします。

子どもの頃、片道四十分かけて歩いた野岸小学校。学校の帰り道トンボを捕まえたり、シロツメクサで冠や首飾りを作ったりしたものです。時期になると木の実がなり、友達と一緒に食べたりした事を思い出します。今考えるとそれはチョット…

十年以上前になるでしょうか。数十年ぶりに小学校の同窓会？あの頃は一年生～六年生までクラス替えが無かったので同級会と言った方がしっくりきます。殆どの人が子どもの頃会って以来なのでわからない人も。私も含めてですが。

仲の良かった友達と昔の話になり、小諸懐古園へ行くことになりました。特別珍しいものがあるわけではないのですが小諸城跡があり、日本のさくら名所、日本の歴史公園百選に指定されています。

子どもの頃は頻繁に訪れていた懐古園も、大人になって訪れると子供の目線とは違った角度から見る事ができるんですね。あいにく桜の時期でもなく、紅葉の時期でもありませんでしたが…何故か穏やかになれるというか、心が落ち着きます。生まれ育った場所だからでしょうか。今は小諸を離れて暮らしていますが、里帰りをする度に帰ってきたくなります。子どもたちもようやく手がかからなくなってきて、自分のために時間を使ってもいいのかなと思える様になってきました。二十年近くなかなか小諸に帰る事が出来ず今日まできてしまいましたが、これからは出来る限り帰郷しようと考えています。

小諸で藩校サミットの開催を！

全国藩校サミットという歴史イベントをご存知でしょうか。

藩校サミットとは、江戸時代の高い教育水準が日本の近代化に大きく貢献したことから、藩校の理念や伝統を現代に活かそうという催しで、毎年各地で開催されています。

昨年11月には第18回サミットが栃木県壬生町で開催されました。

壬生町では藩校学習館の儒学

友達と昔の話で盛り上がる中名残惜しい気持ちを抑えて次に会う時は、地元の温泉へ行く約束をしてお別れをしました。

故郷を後に思うことは…豊かな自然、おいしい空気、おいしい水、そして人の温かさ…この様な素晴らしい環境の中で教育の伝統を汲んで、現在、論語を教育に取り入れる試みが行われています。町内の小学生は論語の語句を抜粋し纏めた『壬生論語古義抄』の素読を実践し、ほとんどの子供たちは暗唱できるまでになっています。

素読とは、意味内容は後回しで、音読し暗唱することから学び始める方法です。成長とともに意味内容を理解するようになる素読教育は、時代を問わず通用する優れた教育方法です。

さて、江戸期の小諸藩では、学問好きで知られた第6代藩主牧野康長公によって藩政に役立つ有用な人間の養成を目的に、享和2年（1802）に藩校明倫堂が創設されました。明倫堂では8歳より15，6歳までの藩士の子弟が漢学、国学の他諸般の武芸を学び、文武両道にいそしんだと伝えられています。

小諸城址である懐古園を有する小諸市で藩校サミットを開催し、藩校明倫堂そして明治期の小諸義塾という好学の気風を今によみがえらせることはできないでしょうか。

内藤徹雄

＝元共栄大学副学長

育ったことに感謝です。幸せを感じます。

不思議なものです。若い頃は県外での生活に強く憧れを持った時期もありましたが、今は人生の最後には長野にいられたらいいなと思う気持ちでいっぱいです。

西澤志信（御幸町出身）